



|                     |                                                                                                                           |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | イノベーションと人工物進化：シュンペーターとネオ・シュンペーター学派の理論的再考を通じて〔論文内容及び審査の要旨〕                                                                 |
| Author(s)           | 小林, 大州介                                                                                                                   |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                                     |
| Degree Name         | 博士(経済学)                                                                                                                   |
| Dissertation Number | 甲第12089号                                                                                                                  |
| Issue Date          | 2016-03-24                                                                                                                |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/62256">https://hdl.handle.net/2115/62256</a>                                         |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                                           |
| File Information    | Daisuke_Kobayashi_abstract.pdf, 論文内容の要旨                                                                                   |



## 学位請求論文の要旨

博士の専攻分野の名称：博士(経済学)

氏名：小林 大州介

## 学位論文題目

# イノベーションと人工物進化

## —シュンペーターとネオ・シュンペーター学派の理論的再考を通じて

本論文は J.A.シュンペーターとネオ・シュンペーター学派を中心とするイノベーション理論を、“人工物の進化”という新たな観点から読み解こうと試みるものである。人工物の進化という観点は筆者の関心から生じたものであり、これまでにこうした視点からシュンペーターやネオ・シュンペーター学派のイノベーション理論に言及した研究は殆ど無い。よって、この観点から議論を進める前に、まずは説明が必要であろう。

この論文は3つの大きなトピックで構成されている。それぞれ、①人工物と文化、そして発明であり、次に②漸進的・系統的進化と発展段階・パラダイム進化、そして③経済成長と経済発展である。それぞれを以下に説明する。

まずは、人工物と文化、発明の概念について考えたい。これらを広義に捉えた場合、すべて人間の作った物理的なモノと共に、人間が獲得した慣習や技能、制度等を表す。人工物の定義は基本的に狭義の物理的人工物を指す場合が多いが、他方で制度や言語体系、法律、国家を含む、広義の定義がなされる場合もある(原田 1997、中島 2005)。文化という語は、古典的な定義でいうと「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習など、人間が社会の成員として獲得したあらゆる能力や慣習の複合体」(Tylor 1871)であり、また発明や人工物をその定義に含む場合もある(Richarson and Boyd 2005)。発明の定義は、14 世紀には発見物(finding)か発見(discovery)すなわち知識や科学に関するものであり、徐々に科学技術における発見や新たな人工物の作製に対して使われるようになった。19 世紀末の社会学者の G.タルドは、発明という語に言語、宗教、行政、法律、道徳、産業、芸術などの分野における創意を含む(Tarde 1898)。

これらの概念は人工物の進化という現象を対象とするときに重要な要素となる。人工物は発明によって生じ、特定の文化における必要を満たし、そしてその知識の社会的学習による共有によって保持される。筆者はこうした観点がシュンペーターを含む初期イノベーション理論に影響を与えたこと、またイノベーション理論のさらなる理解に必要であることを、本論文を通じて議論する。

次に漸進的・系統的進化と、発展段階的・パラダイムの進化について考える。前者の2つは生物学からのアナロジーであり、後者はより大きく、知識形態の進化を表す。漸

進的進化とは、啓蒙思想以来の博物学的な進化思想であり、系統的進化とは、ダーウィニズム以降に見られる、変異、選択、遺伝のメカニズムを持つ進化主体が示す進化形態である。発展段階論とは、社会や経済の進化を段階的に扱う物であり、有機体説のような、初期の社会進化論である。そしてパラダイム論とは、T.クーンが提示した科学的知識の変動理論であり、革命的断続性を示す科学史を説明している。人工物と社会・経済・文化の進化を考察する際、重要なのが、それが人間の進化として現れるのか、それともそれぞれが独立した内的構造を持ち、人間の進化とは独立に進化するのか、ということである。これは長い論争のあるテーマである。

最後に経済成長と経済発展の区別である。経済成長とは、労働力や資本などの成長による生産力の増加であり、経済発展とはシュンペーターが成長と区別した、不確定に市場や社会の与件を変更して静態的均衡をかき乱す、断続的な現象である。1970年代から80年代にかけての不況に対し、均衡を念頭に置き、合理的主体の想定の上に成り立っていた新古典派成長理論は経済の構造変化の問題をうまく表現できておらず、ネオ・シュンペーター学派はこの時期の長期的な不況を説明するため、「シュンペーターが『経済発展の理論』『景気循環論』等で示した動態的市場経済像を、現代経済学の水準で継承」(井上 1999, p.59)しようと試みた。彼等の議論は成長論というよりも、シュンペーターの言う発展論に近い。

上に挙げた①人工物、文化、発明と、②その動態的過程、そして③成長と発展という、これら三つの観点は、本論文の各章を通じ、その根底にある問題意識である。そしてこれらの問題意識はイノベーションと人工物進化という二つの主要なテーマによって統合されている。両者がどのような関係にあるかは、これらの三つの観点を軸として、各章で中心的に、また暗黙的に論じられることとなる。

本論文ではまず、第1章と第2章で、タルドとシュンペーターら、初期のイノベーション研究者が、どのように理論構成したかを考える。その際重要となるのが、啓蒙思想以来の発展思想である、単線的発展論である。タルドやシュンペーターは、当時の歴史学や人類学といった経験的諸科学の成果を借りて、この単線的発展論を乗り越えたと思われる。しかしそれは、不確定なイノベーションという難題に立ち向かう事となる、以後の長い苦闘の第一歩であった。

第2章では特に、シュンペーターと人類学の関係について考察したい。シュンペーターが最初の著作を表していたころ、単線論的發展論は伝播主義という新たな人類学の学派との議論により、支持を失っていた。これらの学派間の争点は、二地点で発見された類似した“発明”をどのように評価するか、という事であった。単線的発展段階論とシュンペーターとの比較は川田俊昭(1972)や、塩野谷祐一(1998)が行ってはいるが、人類学との比較において議論しているものはない。

第3章では、シュンペーター、そしてタルド、そして発明の社会学におけるイノベーション論を比較する。タルドや発明の社会学は B.ゴディン(2008、2014)や中倉智徳

(2014)が議論しているが、それぞれの関連性を詳細に論じてはいない。本章では彼らが扱わなかった、バックグラウンドとなる学問の変遷を考察する。彼らは皆、卓越したリーダーとその追随者という類似した図式の下に社会動学を考察するが、発明の社会学の論者は徐々に、卓越したリーダーという主体を排除する方向へと移ってゆく。その理由は、それらが基にしたバックグラウンドとしての領域における変遷があった。

第4章では“人工物の進化”という視点がイノベーション論にどのような意味を持つかを論じる。この分野の先行研究は見当たらず、中尾央(2015)や三中信弘(2012)の文化系統学、G.バサラ(Basalla 1988)やペトロスキー(Petroski 1998)ザイマン(Ziman 2000)の技術進化論を参考とする。文化進化論の説明は、人工物進化と、そしてシュンペーターのイノベーション論をとともに説明する。また、ペトロスキーの人工物論は、工学的・技術的な背景よりも、文化様式のようなものや、使用する文脈に沿った機能への配慮がそのデザインや種類を決定することを教えてくれる。

第5章では、近年のネオ・シュンペーター学派と技術進化論の理論史を概観し、人工物進化論の可能性を考える。これまで、R.ミエッティネン(2002)や G.フェーゲルベリ(2003)、B.ゴディン(2006, 2007)、そして瀬尾崇(2011)らがネオ・シュンペーター学派のサーベイをしているが、技術進化論との比較をしているものはない。こうした技術論との比較は、R.ネルソン(Nelson. 2005)も強調している通り、重要な意味を持つ。技術進化論の考察では、人工物デザインが非決定的であり、時にダーウィニズムによる盲目的なデザインプロセスの必要性を論じるが、こうした不確実性も、組織化・システム化により軽減される可能性を論じる。